



介助犬を知っていますか？

①

障害をもつとどういふこと



きむら よしとも 1960年大阪に生まれる。半導体製造会社勤務（コンピュータ・プログラマ）。日本介助犬アカデミー理事。財団法人ブラザー・コム評議員。関西学院大学非常勤講師。厚生労働省・介助犬の訓練基準に関する検討会委員、介助犬及び聴導犬の認定基準等に関する検討会委員、介助犬訓練者研修カリキュラム検討会委員、兵庫県・介助犬認定基準等検討会委員。著書に『介助犬シンシア』（毎日新聞社）、『介助犬を知る』（名大出版）。

昨年五月、衆参両院において全会一致で成立した法律がある。

障害者が公共施設へ盲導犬・介助犬・聴導犬を同伴することを保障した身体障害者補助犬法だ。

二七歳のとき通勤途上のオートバイ事故で頸髄を損傷した私は、現在介助犬のシンシアと暮らしている。

事故に遭う前は、スキーやウィンドサーフィンなどスポーツが大好きで、自分が車椅子の生活になるとは夢にも思っていなかった。事故で動かなくなった手足もリハビリに励めば元どおりになり、数カ月後に控えた米国学会でも研究発表できるものと信じていた。しかし受傷から三カ月を過ぎても私の状態は相変わらずであり、ある日主治医から「君は一生車椅子の生活になる」と告げられた。到底信じがたく、受け入れられない瞬間だった。自暴自棄になり家族にも迷惑をかけた。

事故後数カ月はベッドで寝たきりの状態であったが、車椅子にらせてもらい病院の中を散歩できるようになると、自分

と同じように事故で障害を負った人を目にするようになった。車椅子で懸命に中庭の坂を登る青年。口でくわえた棒でキーボードを操作する人。みんな同様に一度は希望を見出せず、死ぬことを考えた人たちだ。それでも病院のリハビリ室はにぎやかで明るい。患者同士気心が知れてくると会話もはずみ冗談も言い合うようになった。私もようやく明るさを取り戻し、リハビリに精を出すようになった。

入院生活も一年半になった頃、会社と病院側、私とで今後のことを相談するカンファレンスもたれた。「とにかく会社へ復帰したい」という私の意向に対して、「どうやって会社へ通うのか？」が問題となった。漠然と考えていた職場復帰の望みが簡単ではないこと、そのためには解決しなければならぬ多くの問題があることを思い知らされた。

その後私は職場復帰を目指して、車の運転訓練を受けるためリハビリテーションセンターへ転院した。結婚して一年あまり、子どものいない私にとって経済的にも介助面においても妻の負担をできる

だけ減らしたい、その一心だった。また、自分にとって最適な仕事はコンピュータを使うことだと考え、リハビリの合間に独学で「第一種情報処理技術者」の資格も取った。車の乗降、手動運転、車椅子の積み下ろしをマスターし、自宅も車椅子で生活できるように改築し、ようやく自宅での生活が始まった。受傷から三年半が経っていた。

希望の自宅での生活が始まったが、入院中はある程度身の回りのことができていたつもりでも、妻も仕事に出かけた日中を一人で過ごすことは大変であった。着替え、洗面、食事など、日常動作のかなりの部分を看護師さんに助けてもらっていたのだと気づかされた。

会社とは退院後も職場復帰について話し合いを続けていたが、「毎日の通勤は難しいのでは？」との判断から、上司が会社に在宅勤務をかけあってくれた。

頸髄損傷者は手や足が動かないだけではない。膀胱・直腸障害、すなわち尿意や便意がなく、外出中はいつ失禁するかと恐々としなければならない人も多い。

また胸から下は汗をかけないため、体温調節がうまくできないなど目に見えない障害を抱えている。

毎日の通勤に自信がなかった私にとって、在宅勤務は願ってもないことだった。しかし、当時はまだ珍しく、私の会社でも前例がなかったため正社員ではなく嘱託社員としての再雇用となった。

「二年契約の嘱託社員、給与は社員の最低水準、月に一・二度出社する、仕事は英語論文の翻訳とデータベース・システムの作成など」と、上司が気の毒そうに条件を伝えてくれた。正社員として復職できないことや低賃金を気にしているのだろうが、私には仕事ができるだけで十分だった。事故から四年半、ようやく私の願いが叶った。

（つづく）

